

子どもとの関わり方の一助となれる言葉を発信していきます

## つながり～共生社会の実現～

“つながり”こそ、真の幸せ…。

コロナは、私たちに多くのことを教えてくれました。

一緒に何かをすることの喜び、一緒に「食」を共にした美味しさ、一緒に頑張ったときの達成感。コロナ前では、当たり前前に思っていたことがどれほど尊く、価値があることかと。

しんどい環境で過ごす子どもの学力が向上したり、より良い社会性が育まれたりするには、大切な要因が関連するそうです。それは、“つながり”があるかどうかということだそうです。もちろん、親と子のつながりが、どれほどの影響があるかはご存じの通りですが、次の7つのつながりも大切とのことです。

- ①子ども同士のつながり
- ②教師と子どものつながり
- ③学校と保護者のつながり
- ④教師同士のつながり
- ⑤学校と地域のつながり
- ⑥学校と学校のつながり



⑦学校と社会のつながりです。“つながり”は、学術的に言うと“社会関係資本”になるそうです。「きずな型」(bonding型)、「架け橋型」(bridging型)、「結合型」(linking)があります。(詳しくは、志水宏吉『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房、2014、第3章を参照してください。)

しんどい状況の時、仲間の存在は、どれほど支えになることでしょう。

実は、この“つながり”は経済的な効果だけでなく、医療にも関連します。孤独や孤立が心身の健康を脅かす一方、“つながり”が心身をより健康に導くのです。

先日、ボランティア活動で少年センターあすくりに通所する若者と同居されている高齢者の方とのコラボレーションをしました。お互いのウェルビーイングの向上が目的です。若者が手作りした石けん、地域から寄付を受けたお米や企業寄付を届けました。民生委員さんとソーシャルワーカーのわたしとが連携し、福祉の縦割りを「越境」しました。お互い名前も顔も知らない、初めての出会い、笑顔いっぱい、素敵なひとときでした。まさに“架け橋型”です。核家族化が進んで、コミュニティも希薄化している中、多様なつながりも織り交ぜながら、縦横斜めの温かい織物のようなネットワークができれば、誰一人ひとりぼっちにならない優しい社会が実現するのではないのでしょうか…。

滋賀県 SSWSV (スクールソーシャルワーカー・サポート・ハイザー) 上村 文子